

学長賞

「旅のラゴス」 筒井康隆（新潮社）

フードビジネス学科 蟹澤尚紀

この小説を読んで感じたことは、自分はとても小さなコミュニティの中で生きているということです。この物語は主人公ラゴスが生涯をかけて世界中を旅して地元へ帰ってくるだけの話です。よくある物語かと思いますが、SF要素がある作品なので飽きることなく最後まで一気に読むことができます。

ラゴスは常に冷静で理性的、かつ優しいという、とても魅力的な人物です。そして旅をしていく中で超能力を持った人々に出会っていきます。集団転移、壁抜け、そして作中で2度も奴隷の身に落とされます。ラゴスが旅をする目的とはいったい何かを考えさせられ、そんなラゴスに感情移入してしまいます。しかし、ラゴスは目的を持って旅をしているようですが、最終的には「旅」そのものが目的であることが最後まで読むことで分かります。旅を始めたころのラゴスには目的があったようですが、旅中でできた他の目的のために旅をすることになります。ここで旅の目的は固定的なものではなく、流動的なものだとして認識させられます。主人公ラゴスに「人生そのものが旅なのだよ」とメッセージを投げかけられているように感じ取れました。

ラゴスが旅を始めた地元へ帰ってきたのは出発してから40年後のことです。時間の経過は文中では1行にまとめられています。何年、何十時間もたった1行です。人生の数年もあっという間に過ぎてしまうものなのかなと感じました。

中盤以降はまるで自分がこの世界を旅しているように思え、情景を思い浮かべていました。作中で「人間はただその一生のうち、自分に最も適していて最もやりたいと思うことに可能な限りの時間を充てさえすればいい筈だ。」とあります。僕自身、様々な物に触れ、経験し、多くの人に出会い、ラゴスのように旅のような人生を送っていきます。ぜひ「旅のラゴス」をご一読下さい。